

A horizontal bar at the top of the slide, composed of several thin, parallel lines in the colors of a rainbow: red, orange, yellow, green, blue, and purple.

RAINBOW CAMP

イベントゴミ削減について

2019.03.15

■ イベントゴミの概要

1. イベントゴミとは

近年、大量生産・大量消費・大量廃棄の生活スタイルの見直しが急務となっている。日常の生活においては、ゴミ減量の対策が幾らかはなされるようになっているが、非日常の場であるイベント・お祭りにおいてはその実態さえ把握されていないのが現状である。

2. イベントゴミの実態

- ・ イベント等のごみを事業系にするか否かについて、環境省は各自治体に判断を任せているため、その取扱いは自治体により様々である可能性がある。
- ・ 参加者一人当りの排出量は、20g～40g が多い。
- ・ イベント等のごみ量は、人出、天候、飲食店出店数・利用度、滞在時間が影響する可能性があると考えられる。
- ・ ゴミ減量対策は、飲食容器に対する対策、その他のごみの資源化対策、及びこれらの促進策を中心とし、その他に散乱ゴミ対策、啓発がある。

3. イベントゴミ減量対策

ゴミ減量対策においては、飲食店で使用される食器類の削減・資源化と、その他の排出されるごみの資源化が主に考えられている。加えて散乱ゴミ対策も行われている。食器類の対策についてはゴミ減量を考える際の原則である 3R の原則に基づき、さらに **Reduce, Reuse, Recycle** にわけて分類をした。

Reduce としては場内缶ビン不売という方法等がある。

Reuse としては、観客が食器を持参するマイカップ・マイボウルや、主催者が用意した食器を洗って繰り返し使い、使い捨ての容器を削減する洗い皿システム等がある。

また **Recycle** としては、プラフィルム付き紙トレイを利用する事例もある。これは、プラフィルムを貼ることにより紙トレイに汚れがつかないようにして、紙トレイの資源化を容易にした物である。

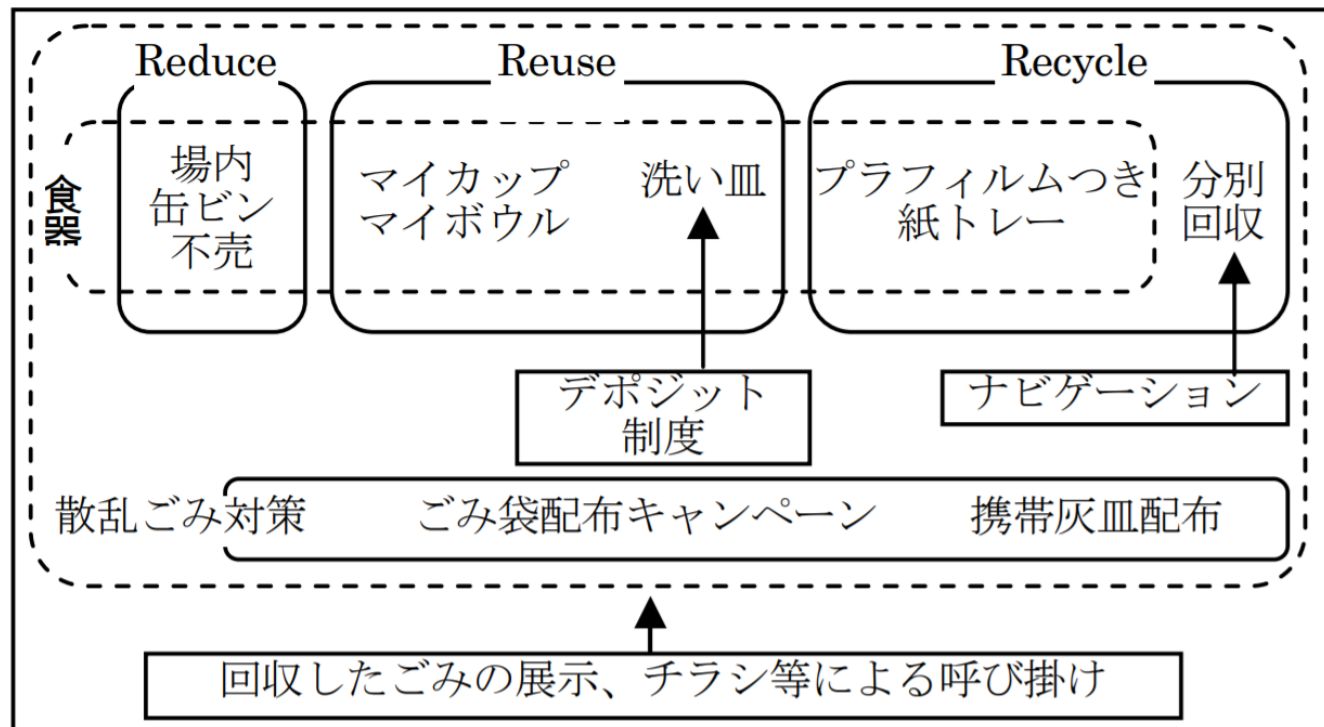
排出されたごみの資源化対策には、分別回収がある。

■ イベントゴミ減量対策の分類

1. イベントゴミを周知するには

販売時に食器の預かり金を上乗せし、食器が返却されたら返金するデポジット 制度を導入している事例や、分別回収を促すためごみを捨てにきた人に対して分別を案内するナビゲーションを行っている事例もある。以上のような対策に加え、対策を案内するためのチラシ等による呼び掛けや、回収したごみの展示が行われることもある。

2. 対策の分類



■ イベントゴミ減量の重要性

1. ごみの減量は環境問題の身近な課題

ごみになる前の製品は、もともと天然の資源を使って作られている。紙やプラスチック・ガラス・金属などを大切に使わなければ将来、資源が足りなくなるかもしれない。

また、製品の製造や運搬には石油などの多くのエネルギーが使われ、ごみを燃やしたときに発生する二酸化炭素は地球温暖化の原因にもなっている。

2. 脱プラスチック

石油から作られるプラスチック。プラスチックは、年間3億トンが生産され、石油産出量の8%を占めている。そのうちの半分が容器包装に使用されている。

プラスチックは軽いので遠くまで運ばれ、かつ自然分解されずに半永久的に残るという特徴がある。

そのため使用済みプラスチックは、ポイ捨てや、ゴミ処理施設へ輸送される過程で環境中に出てしまったあと、雨で流され最終的に海に流れ着く。

そして、ものとの接触や紫外線の影響で劣化し、5ミリ以下のマイクロプラスチックとなる。

洗濯バサミの白い粉などが、身近で劣化を確認できるわかりやすい例だ。

海の中の魚が、マイクロプラスチックを食べてしまう問題もある。東京湾で釣った64匹のイワシのうち、80%にあたる44匹のイワシの体内からマイクロプラスチックが出てきたという調査結果もある。

油との親和性が高い汚染物質が、生物の脂肪に移り、体内に蓄積してしまうのだ。

その生物の体にとってももちろん良くないが、それを私たち人間が食べていることを忘れてはいけない。

2025年にはプラスチックが2015年と比較して10倍になると予測されている。そんななか、国や企業はさまざまな取り組みをはじめている。

プラスチックの使い捨てやプラスチックバッグを規制しているか規制を決めた国には、EUをはじめ、チリ、バングラデシュ、ケニア、エチオピア、台湾などがある。オーストラリア、アメリカ、デンマーク、インドなどでは、一部の州や島でプラスチックの使用が規制されている。

プラスチックを再利用するための焼却炉の建設には100億円、稼働には年間2億円以上かかり、施設の寿命は30年程度だ。30年経過したら、100億円かけてまた新しいものを作らなければならない。そして、古い焼却炉には高濃度のダイオキシンや貴金属が含まれるので、解体にはさらに膨大な費用がかかる。

■まとめ

毎日の生活の中で必ず一回は目にするプラスチックごみ。ペットボトルからお菓子の包装、レジ袋、ビニール傘、服にいたるまで、あらゆるものがプラスチックでできている。

しかし、ストローであれば数秒、パンの袋であれば数分使われるだけの寿命のために、多くの資源やエネルギーが犠牲になっているのだ。

これだけプラスチックに囲まれた生活をする中で、プラスチックのない世界なんて考えられないかもしれないが、そうではないと思う。上記の世界の事例にあるとおり、クリエイティブに考えれば、プラスチックを使わない、または減らす方法はたくさんある。

なによりプラスチックを減らすことは自然環境のためだけではなく、巡り巡って私たちの健康のためでもあるのだ。国レベルで動くことももちろん、それと同じくらい、またはもっと大切なことは、私たち消費者のマインドシフトである。風呂敷を使ったり、マイボトルを持ち歩くなど、小さな行動なしには問題は変えられないことを忘れてはならない。

「大量生産・大量消費・大量廃棄」の社会の縮図であるイベントの中でごみ削減の本当の意味を理解し、参加者自身が意識し行動が出来るようになって欲しいという思いのもと活動を繰り返し広げていきたい。